

とあるが新計算方式とは具體的に果して何を意味するものか了解に苦しむものである。今假に一步を譲り之を獨立採算制或は之に類似するものと推察するならば寧ろ各發電所毎に經營單位を定むべきであつてその方がより一層大山試案に示された所謂「經營責任體制の確立」を計り得ることとなるのではないか。

又産業の民主化とは必ずしも分割を意味するものではなく企業の運営の内にこそ求め得られるので鐵道、遞信等の公共事業の民主化の問題にしてもそれが決して分割化されることによつて得られるものに非ざることをこそ思ふべきである。

斯くして大山試案に盛り込まれた内容はその方針と要領との間に一貫性を缺き反つて發送電事業の一社化に對する強力な基礎付けにこそなれ決して分離案に對しての正當な根據を與へ得るものとは云ひ難いのである。

五、むすび

以上我々は主として經濟的觀點よりして北海道電氣事業分離案の可否に付検討を加へ、その結果分離案の妥當ならざること主張したのであるが、然し之は飽く迄も北海道の電氣事業の現状を考慮した上のことであつて將來本道電氣事業の設備の改善、擴充竝に經營の安定が實現された曉に於ては必ずしも分離案に反對を唱へるものではない。

唯過度經濟力集中排除法の即時適用に對する除外例を望むのは北海道産業の開發と日本經濟の再建を希求するが爲に外ならぬからである。

(文責、石河英夫)

學界

最近の協同組合文獻

岡 本 理 一

本誌第四號に、終戦後から昭和二十二年七月頃までの我が協同組合文獻の主なるものを掲げたが、こゝにはそれ以後に入手した單行書と雜誌論文を紹介したい。すでに商工協同組合法や農業協同組合法の實施をみ、また近くは消費生活協同組合法も實施されようとして、協同組合運動もいよいよ活潑となり、良い文獻も次第に増加してきたが、紙幅の都合で紹述が簡單になったのはやむを得ない。

一、近藤康男博士著「協同組合原論」(B6版、二八一頁、昭和二十三年六月、東京、農業協同組合研究會發行、定價百十圓) 著者は有名な農業經濟學者で、終戦後、東大教授に復歸した人。本書は昭和十年發行の第二版に、若干字句の修正を加えた復刊書である。その特色は第一編「協同組合の本質」に關する理論的考察にみられる。すなわち資本主義と協同組合との關係につき、東畑博士(「協同組合と農業問題」)のごとく、協同組合を以て資本主義經濟組織を揚棄してそれに代るものとみず、反つて資本主義の内部において流通過程の合理化をはかる組織として、この上に精神的要素が附け加わるとしていること、

消費組合に關し抽象化された消費者一般を構成者とみず、その本質的部分は工業労働者であるとしていること、そしてこの間、本位田博士の消費組合論に對し鋭い批判を加えていること等は、「原論」の名にふさわしい論述ぶりである。第二編は「我國農業問題と協同組合」を取扱い、農業協同組合の目標は商業利潤の低減にあると言う見地から、戦前の我が農村における信用組合、米穀販賣組合、養蠶業、反産運動、農村の工業化、農産物販賣組織等につき、具體的な論述を行つたもので、今日の事態からみて参考となるところ少くない。斯學研究者の必讀書としてすゝめられる。

二、奥谷松治氏著「協同組合論」(B6版、二四三頁、昭和二十三年四月、東京、農業協同組合研究會發行、定價八十五圓)

十年前、唯物論全書の一巻として出されたもの、改訂版である。前記の近藤博士の著書が東畑博士の著書を對象として批判的論述が行われているのに對し、本書は主に近藤博士の著書を對象として理論構成がなされている。協同組合の意義を「労働者・諸使用人および獨立小生産者に對する商業資本・高利貸資本の搾取を合理化し、それ等に資本主義的技術を採用させる組織」と規定し、また研究方法として唯物史觀的方法をとり、協同組合學というごとき獨自の理論體系の成立を認めず、それは經濟學、經濟政策論、經營學等に包含せられるものとし、更に協同組合の基礎を本位田博士等の言う「協同組合精神」に求めず、特定の物質的生産力の發展段階が形成する社會經濟的構造に求めていること等は、異色ある論述と言わねばならぬ。尙、

本論の第一章はイギリスの消費組合、フランスの生産組合、ドイツの信用組合、日本の協同組合が、社會の經濟構造といかなる關連を以て發生したかを明かにし、第二章以下は協同組合の種類、内部組織、經濟的機能、政治活動を詳しく述べている。全體を通じて抽象的、觀念的でなく、具體的に體系化した論述がなされているので、入門書としてよく、また協同組合主義の信奉者に一の反省を與えるためにも參照が望まれる。

三、福田敬太郎博士稿「協同組合の性格」(神戸經濟大學經濟研究所編「國民經濟雜誌」第七十九卷第一・二號——昭和二十三年五月、大阪、創元社發行、定價三十圓——所載、A5版一四頁)

本論文は終戦後に生誕した我が協同組合の多くが、商工業、農業、生活の何れの部門のものたるを問わず、眞正な歩みをせず、横道にそれている體あるに鑑み、それを正道に戻すため、改めてその性格の吟味と正しい把握を試みられたものである。先ずフリーエやオーエンの思想より説いて、その進取的理想性を明かにし、次にこれの具體的説明としてロッヂデールの諸原則が一々述べられている。更に農業協同組合の重要性和、これと生活協同組合との關係に論及し、前者の共同販賣、後者の共同購買が賢明な方法として提示されている。最後に協同組合は現實によく對處して能率的、建設的に役割を果たすと同時に、本來の理想である人間性の改善を目指し、謂わゆる現代的騎士道を歩むところに眞の性格があるとされる。最近この方面の研究を進めていられる博士の初論文と思われるが、明快な論述ぶり

はよく讀者に協同組合の倫理的性格を納得せしめ、續く次の論文が待望せられる。

四、雜誌・社會圈・特集「組合の理論」(「社會圈」第二卷第三號——昭和二十三年三月、東京、青山書院發行、定價二十五圓——所載、A 5 版、三三頁)

組合運動の健全化をはからんため、特集のテーマとしてとりあげられたものである。協同組合の理念(本位田祥男)、組合の社會學(武田良三)、農村協同組合の問題(國弘員人)、消費組合論(山村喬)、中國合作社(幼方直吉)の五つが協同組合に關するもので、他に労働組合の現課題(藤林敬三)その他がある。もしこれに商工協同組合論が一つ加われば形式上、整つたものと言ひ得よう。所載の評傳・「シドニー・ウェッブ夫妻」(五島茂)は名著「消費組合運動」(一九二一年)等の著者の學問的生涯を知る上に、讀んで甚だ有益である。

五、國弘員人教授著「協同組合概論」(A 5 版、一七二頁、昭和二十三年五月、東京、巖松堂書店發行、定價九十圓)

前著「協同組合」(昭和二十二年六月)を新しく書き直したもので、章節は大體、同一であるが、内容は豊富となつてゐる。協同組合を定義して「資本主義における消費者または小生産者という經濟的弱者の組織する組合」とする見解は、前記近藤博士や奥谷氏の所説にやゝ近いが、同様の思想的立場にあるか否かは詳でない。概論風に述べてあるので、協同組合論のテキストに好適のものであらう。

六、國弘員人教授著「アメリカ協同組合」(B 6 版、一九二

頁、昭和二十三年四月、東京、巖松堂書店發行、定價八十圓) 今日、アメリカの協同組合がいかなるものであるかは、我が國の研究者や運動當事者の關心事であらう。本書はかゝる要請にこたえたもので、特に第一章の「アメリカに於ける協同組合論」において、協同組合と資本主義、社會主義、協同組合主義との關係につき、同國諸學者の見解を述べてゐるのは、我が組合運動の進路に對し教示するところ少くない。また第二章の農業協同組合、消費組合、信用組合の發達史、第三章のこれら三組合に關する諸立法の論述も、同國の組合政策を傳えるものとして有益である。

尙、同教授が東京商科大學産業能率研究所編「アメリカ經營學研究」(A 5 版、二五七頁、昭和二十三年二月、東京、經營評論社發行、定價百二十圓)に寄稿された「アメリカの商工組合」(二〇頁)は、前記著書にない商工業の組合事情を論述したもので、兩者併せて同國協同組合の全貌を明かにするものと言ひ得よう。

七、柳下 勇教授稿「アメリカに於ける消費組合運動」(橫濱市立經濟專門學校橫濱經濟研究所編「橫濱經濟研究所時報」第四十一號——昭和二十三年一月、同上所發行、非賣品——所載、A 5 版、一七頁)

生活協同組合が各地に設けられるに伴い、アメリカのこの運動がいかなる状態にあるかは、人のよく尋ねるところである。前記國弘教授の著書にも論述されているが、本論文もこれを取扱い、一八四四年のボストンにおける一購買組合の創設から、

南北戦争を経て、一九二〇年代に至るまでの發達が資料豊かに述べられている。更にそれ以後今日までの組合運動を明かにする詳しい續編の出ることが待たれる。

八、ニコライ・レーニン著、高山洋吉氏譯「協同組合論」(B 6版、一三八頁、昭和二十二年七月、東京、白揚社發行、定價二十八圓)

レーニンがロシア革命の各發展段階——ナロードニキに對する闘争時代から新經濟政策の時代まで——において、協同組合につき發表した演説や論文の中から主要なものを邦譯し、これに上記の書名を附けたものである。生産手段が労働者階級に屬せるソ連において、オーエン流の協同組合を排し、しかも「協同組合組織は社會主義に完全に一致する」というレーニンの言説を理解するのに一讀すべきものである。こゝでは協同組合は社會改良の一手段でなく、プロレタリアートの階級闘争の有力な手段とせられている。

九、直井武夫氏著「ソヴェートの協同組合」(B 6版、一八六頁、昭和二十二年十一月、東京、彰考書院發行、定價五十五圓) 社會主義運動が進展し、經營に對する人民の參加、管理が考えられるに伴い、ソ連における協同組合の實態が注目せられる。本書によると、ソ連の協同組合は社會主義計畫經濟の農業部面における擔當者として主要な活動をしていることが知られる(コルホーズ、消費組合)、組織は民主的であつても、黨の嚴重な統制下にあるため、その活動は國家計畫にもとづいてなされ、資本主義國のごとき自主性は全然ないらしい。内容は第一

部帝政ロシアの協同組合、第二部社會主義の建設と協同組合、第三部協同組合の原理で、更に章、節に分けて論述されている。經濟の社會化的動向が實認される今日、參照すべきものであろう。

十、本位田祥男博士著「生活協同組合」(B 6版、一四二頁、昭和二十二年八月、東京、日本協同組合同盟發行、定價四十圓) 消費生活協同組合法の實施を間近にひかえ、これに關する平易な解説書が望まれる。本書は名著「消費組合運動」(昭和六年一月)の刊行以來、斯學の權威として今日に至つた博士が、終戦後の新事態に對處して執筆されたものである。淡々たる筆致で生活協同組合に關する事柄がほとんど論じつくされているので、この新しい組合の何たるかを知らうとする人には、好個の參考書である。

十一、橋浦泰雄氏著「協同組合の育て方」(B 6版、八二頁、昭和二十二年九月、東京、毎日新聞社發行、定價十八圓)

著者は東京都生活協同組合連合會理事長の職にある人で實務の経験家。第一の組織篇で創立準備委員會、創立總會、機關と運營の仕方、參考書類等が説かれ、第二の經理篇で組合簿記の大様が説かれている。實務者の參照しおくべきものであろう。

十二、農林省農政課編「農業協同組合法の解説」(B 6版、三〇〇頁、昭和二十三年二月増補版、東京、日本經濟新聞社發行、定價百二十圓)

昨年十二月十五日の農業協同組合法の施行に前後して、同法の解説書が可なり出ているが、本書は農林省農政課の四人の事

務官が共同執筆したもので、農業會の解散や新組合の設立と運営に關係する人々を對象としている。農業協同組合法の全條文（百二條）と、同法の制定に伴う農業團體の整理等に關する法律の全條文（三十九條）が詳細に解説してある。執筆者の顔觸れからみても、最も信頼し得る好參考書と言ひ得よう。

十三、日本放送協會編「農業協同組合解説」（B6版、一四六頁、昭和二十二年十二月、東京、日本放送出版協會發行、定價四十五圓）

日本放送協會が農業協同組合の何であるかを、分りやすく農民に知らしめるため、メモ「第一篇」、講演「第二篇」の形で放送したものを同法の施行を機會にまとめて刊行したものである。放送をきく氣易さで讀めるので、多忙な農家の人々に手頃な解説書であろう。講演者は農林省の課長、課員や斯界の權威者であるから、内容は俗に墮した低級なものでない。附録として農業協同組合法他一がある。

十四、以上のほか、雜誌「協同主義」（月刊、東京、協同主義協會編）、「中小企業」（月刊、東京、商工協同組合中央會編）には毎號、協同組合に關する論文、解説、資料等が掲載されているが、これらを一々紹介することは省略したい。

十五、最後に拙稿「消費組合配給論」（本誌第五號、昭和二十二年十二月、所載、A5版、二八頁）をあげてことを許されたい。これは配給論の見地から消費組合の生成と事業を考察したもので、その販賣、購買事業と限界に關する論述及び現下の組合運動に對する論評につき、各位の嚴批を賜れば幸甚である。（昭和二十三年九月十日）

昭和二十三年十一月廿五日印刷
昭和二十三年十一月三十日發行

社會經濟研究（年四回發行）

定價 三十圓

編輯者 小樽市綠町四丁目七番地
室 谷 賢 治 郎

印刷者 札幌市南二條西八丁目
安 藤 勇 逸

印刷所 札幌市南二條西八丁目
北海道開發株式會社
札幌印刷第一工場

發行所 小樽經濟專門學校
經濟研究所

代 行 北 方 出 版 社

札幌市北四條西二丁目
振替口座小樽九一四三番
出協正會員A二〇八〇五二番

◆ 本誌の豫約及び註文は一切前金のこと
◆ 振替口座 小樽九一四三番 北方出版社
「社會經濟研究」係宛御振込のこと